

論文作成 初歩の初歩

～添削って大変なんですよ～

平成20年01月08日

信号(地震)班

毛利 元昭 (D1)

執筆するときの心構え

- 自分の研究の集大成だと意識する
 - 削ることよりも盛り込むことを考えるべし
- 研究室の財産となることを意識する
 - 他者に、理解することを諦めさせないよう
- 休憩時間はあっても休日は無いと考える
 - 「論文執筆のための休日」ならいいですが・・・
- 自分の研究の理解を深める機会にする
 - 今まであやふやだった部分は調べ直すこと
- 基本的に研究室で書く

添削されるときの心構え

- 「添削不要と思うもの」を持っていく
 - まずは自分で添削
- **血の雨**を降らされても文句を言わない
 - 愛情です。憎けりゃ添削なんて面倒なことはしません
- 指摘を単純に丸呑みしない
 - 指摘は正しいか、もっといい表現はないか
- 何度も同じ指摘を受けない
 - +以前の指摘に類似した部分も直すこと
- 添削者はかなりの労力を費やしていると意識する

改行・改段落・章立て

- 本文中では強制改行(¥¥)を用いない
- 「言いたいこと」の一塊を一段落にする
 - 1行のみや1文のみの段落を作らない
 - 長すぎる段落を作らない
 - 情報を脳ミソにスタックしておける範囲で
- 章や節の名前は具体的に
- 小節(¥subsection)を多用しない
 - 小々節(¥subsubsection)も

句読点

- IME等で句読点を「,」「.」に設定しておく
- 句読点で息継ぎしつつ、実際に音読してみる
 - 息継ぎが多い = 読点が多すぎ
 - 息が続かない = 句読点が少なすぎ
- 接続詞の後は読点を入れる
- 意味のある塊は、長すぎない限り分離させない
- 2行以上の文を作らない
- 英語、数式中は半角句読点＋空白

かな・漢字・カタカナなど

- ざっと見で濃すぎず薄すぎずな程度
 - 濃ければ漢字が多すぎ, 薄ければ少なすぎ
- かなと漢字の使い分けは基本的に別紙参照
 - 例:「一方」→「いっぽう」
- ひらがなならひらがな, 漢字なら漢字に統一
- カタカナ語は多用しない
 - むしろ英語での表記を考えること
- 初登場の略語には正式名称を添える
- 全角英数記号と全角スペースは使わない

図表

- すべての図表にラベルを付けること
- 基本的にトップかボトムに配置
- キャプションだけで何の図表かわかるように
 - データの場合、パラメータやプロパティを添えること
- 見やすさのため複数の図表を結合させてもよい
 - 「(a) ~」などといったラベルをそれぞれに添えること
- 文字は大きく、線は太く
 - 1/2に縮小印刷しても読める程度
- モノクロ印刷でも区別がつくよう
 - 文中でも色のみでの指示は避けること(例: **緑色の破線**)
- 表の最左列は左揃え、数字のみの列は桁揃え

数式

- すべての数式にラベルを付けること
- 一般的な関数(sin, log, max, etc...)は直立体
- ベクトルは太字, 行列は大文字太字
 - スカラ要素は非太字
- 入れ子の括弧は「¥left(」¥right)」を利用
- 複数行の式(eqnarray)はまとめて1つの番号
- 式を指示する際には括弧を付ける(例:式(1))

ちょっとした工夫

- 推敲ノートを作り, 添削時に持参する
- 明らかなミス以外は, コメントでしばらく残しておく
- 章ごとに添削してもらおう
- 気になる部分は予めマークしておく
 - もちろん, TeX原稿にはコメントを入れておく
- 他者の論文の表現を「吟味した上で」拝借する
 - キーワードでWeb検索すれば出てきます
- 実験や考察の章から書き始める
- 別の班の人にも読んでもらう

読みやすさのために

□ 太字を利用

- 南條@中間発表が良い例

□ 特殊な箇条書きを利用

- 八木田, 藤田@中間発表が良い例

□ 脚注を利用

- 本文中に入れるとゴチャゴチャしてしまう説明など

添削する側へ

- キレないこと
 - とはいえ, そんなに酷いのは来ないはず
- 添削の解像度は徐々に上げていくこと
 - 流れ→内容→文章の整合性→表現
- 可能な限り, 押し付けるのではなく引き出すこと
 - 質問攻めにしてみるのもよい
- 読める字で赤を入れること
 - スミマセン. 私も字が汚いです……。大きく書くとよい
- 自分の文章も見直すこと
 - 「目くそ鼻くそ」では立つ瀬がありません. 自分もレベルアップ